

捉えがたき明晰さ
----知覚内容の非概念性----

信原幸弘（東京大学）

『思想』No.949, 2003, pp.142-160

われわれが知覚的に表象する世界は概念的に表象する世界よりもはるかにきめ細かな特徴を備えているように思われる。たとえば、いま目のまえに赤いリンゴがふたつあるとしよう。それらはどちらも赤く見えるが、それでも微妙に異なる色合いに見える。つまり、われわれはそのふたつの色合いを知覚的に区別して表象できる。しかし、そのふたつの色合いについて、われわれはそのいずれの概念ももっていない。それらの色合いを表す言葉を知らないし、別の機会に何か赤いものに出会ったとしても、それがそのような色合いを備えているかどうかを必ずしも判別できない。われわれは赤や青の概念をもっているが、微妙に異なるふたつの赤の色合いについては、そのような概念をもっていない。とすると、ふたつのリンゴが微妙に異なる赤に見えるとき、この知覚はそのふたつの色合いを概念的に表象しているわけではないことになる。知覚的に表象される特定の色合いはその色合いの概念を用いて表象される色合いではない。

このように知覚的に表象される内容が概念的ではないこと、あるいは少なくとも概念的でない内容を部分的に含むことは、明らかであるようにみえる。思考は概念的内容をもつが、知覚の内容は思考の内容とは基本的に性格が異なるように思われる。

じっさい、知覚の表象内容にかんして非概念主義の立場をとる論者は多い。かれらは知覚の内容が非概念的であることを直観的に確信したうえで、どのような点で非概念的であるかを正確に規定しようとする。これにたいして、しかし、知覚の内容は思考の内容と同じく概念的であると主張する勇敢な論者もいる。

このような概念主義をとる論者を動機づけているのは、知覚についての現象的な反省ではなく、ある超越論的な議論である。われわれは思考にもとづいて別の思考を形成するだけでなく、知覚にもとづいて思考を形成することもある。たとえば、ある対象がまるく見えるから、その対象はまるいと考える。このとき、知覚はいかにして思考を正当化するのか。もし知覚が思考とちがって概念的内容をもたないとすれば、知覚はたかだか思考を因果的に引き起こすことができるだけで、それを推論的に導き出すことはできないようにみえる。理由関係は概念的内容をもつものあいだでのみ成立するのであって、概念的内容をもつものと非概念的内容をもつもの（あるいはそもそも内容をもたないもの）のあいだには成立しえない。したがって、知覚が思考の理由となる以上、知覚もまた概念的内容をもたなければならない。知覚がどれほど思考と別種の内容をもつように見えようとも、知覚は思考と同じく概念的内容をもたなければならない。そうすれば、知覚が思考を正当化することにも何の問題もなくなるというわけである（1）。

以下では、知覚がはたして非概念的内容をもつのかどうかを検討していきたい。また、もつとすれば、どのような意味でもつといえるのかを明らかにしたい。この問題を考察する過程で、われわれはそもそも概念とは何かという根源的な問題にまで遡らなければならない

ないことになるだろうし、また意識の自己反省的な性格や、知覚と行動の関係といった大きな問題にも踏み込まなければならないだろう。このような諸問題をできるだけ見通しよく配置しつつ、知覚内容の非概念性を多少なりとも明らかにしていきたいと思う。

1 直示的概念

知覚の内容が概念的ではないことを主張する非概念論者のひとつの大きな論拠は、すでに述べたように、知覚の内容が概念的な内容に比べてはるかにきめ細かい(fine grained)ということである。たとえば、エヴァンズは「われわれは自分が感覚的に識別できる色合いと同じ数だけの色概念をもっているという考えを本当に理解できるだろうか」(Evans 1982, p.229)と、概念主義者の考えに疑問を投げかける。

これにたいして、概念主義を代表するマクダウエルは、エヴァンズが念頭においている一般的な色概念(たとえば「赤」や「緑」のような日常的な色彩語と結びついた概念)はたしかにわれわれが知覚的に識別できる色合いの数に遠く及ばないが、われわれはそのような一般的概念だけではなく、「直示的概念」をも行使しようと反論する(McDowell 1994, pp.56-7)。

たとえば、あるリンゴがある特定の赤に見えるとき、われわれはその特定の赤の概念をあらかじめもっていなくても、色合いの概念さえもっていれば、その特定の赤を<その色合い>という概念によって捉えることができる。この直示的な概念はその特定の赤を見たときにそれと同時に形成され、たとえほんのしばらくしか持続しないとしても、その知覚経験が消滅した後もしばらくは持続する。したがって、もとのリンゴを見たすぐ後に別のリンゴを見たとすれば、それらが同じ色合いかどうかを知覚的に判別できる。あるリンゴをある特定の赤として知覚的に表象するとき、そこで行使されているのはその特定の赤のこのような直示的概念である。

ここで少し注意を要するのは、<その色合い>という直示的概念は「その色合い」という直示的な言語表現と結びついている概念とは異なるということである。「その色合い」という表現と結びついている概念は<その>という概念と<色合い>という概念から形成される複合的な概念である。したがって、それは「その赤」や「その深紅」と結びついた概念とは異なる。しかし、ある特定の赤を知覚したときに形成される<その色合い>という概念は、その知覚に即して同じように形成される<その赤>という概念や<その深紅>という概念と同じである。それらはすべてその特定の赤を同じように知覚的に表象することを可能にする同一の概念である。それらはただ、それらが形成されるときに利用される一般的な概念(<色合い>、<赤>、<深紅>)が異なるだけで、形成された概念は結局、同じである(2)。

こうして直示的概念に訴えれば、われわれはわれわれが知覚的に識別できる色合いと同じ数だけの概念をもちうる。したがって、知覚の内容が概念的な内容よりきめ細かであるということを利用して、知覚の内容は非概念的だとはいえない。マクダウエルによれば、知覚によってあるきめ細かな特徴が表象されるとき、そこではその特徴の直示的概念が行使されることによってそのような表象が可能になっているのである。

ここで、きめ細かな特徴の直示的概念がその特徴と知覚的に出会ったときにそれと同時

に形成されるという点に少し違和感が感じられるかもしれない。あるリンゴがある特定の赤に見えるとき、それと同時にその特定の赤の直示的概念が形成される。しかし、その直示的概念は、その知覚においてすでに行使されている概念である。ここでは、ある概念をもつことと、その概念を行使することとが同時である。このようなことがありうるのだろうか。概念の行使はあらかじめ保持されている概念の行使でしかありえないのではないか。

しかし、この問題は何も直示的概念に限ったものではない。ふつうの一般的な概念でも、経験的に習得される概念であれば、そのような事態が必ず起こる。たとえば、机の概念を習得するとき、われわれはその概念の正しい行使の仕方を経験的に学習する。そしてその概念を正しく行使したとき、その概念を獲得したといわれる。しかし、このとき、その概念の正しい行使とその獲得とは同時である。さきに概念が獲得されて、それによって正しい行使が可能になるのではない。正しい行使と同時に概念が獲得されるのである。

マクダウエルはとくに指摘していないが、かれが想定する直示的概念はじつはふつうの一般的な概念と実質的には変わらない。それは、あるきめ細かな特徴が知覚されたときにただちに形成され、その後ほんのしばらくのあいだしか持続しないという点で、一般的な概念と異なるが、持続しているあいだは一般的な概念とまったく同じように働く。われわれが赤の概念をもっているときに、いつでもあるものが赤いかどうかを知覚的に識別できるように、ある特定の赤の概念をもっているときには、ほんのわずかなあいだとはいえ、そのあいだならいつでもあるものがその特定の赤であるかどうかを知覚的に識別できる。

じっさい、直示的概念と同じくらいきめ細やかな概念をふつうの一般的な概念と同じように長期にわたって保持している人もいる。たとえば、画家は通常の人には再認できないようなきめ細かな色合いをいつでも再認できるし、音楽家はきめ細かな音色を、ソムリエはワインのきめ細かな味わいを再認できる。このような専門家のもつ概念は、その獲得の仕方や保持期間の長さには違いがあるとはいえ、概念としての働き方は直示的な概念と何ら変わらない。

こうして直示的概念にはとくに大きな問題はないように思われる。それは専門家のきめ細かな概念やふつうの人の一般的な概念が概念として認められるのと少なくとも同程度にはまっとうな概念として認められよう。

しかし、このような直示的概念が本当にマクダウエルが主張するように知覚において行使されているのだろうか。ケリーはまさにこの点に疑問を投げかける(Kelly 2001b, p.412)。直示的概念は、ほんのしばらくとはいえ、それを形成する契機となる知覚が消滅してもなお存続する。そうでなければ、それは概念とはいえないだろう。概念は複数の機会に行使できてはじめて概念である。たった一度の機会にしか行使できないものは、概念であるために必要不可欠な一般性の条件を満たしていない。マクダウエルがごく短期間とはいえ直示的概念の保持にこだわるのはそのためである(McDowell 1994, p.57)。しかし、このような持続性を有する直示的概念が知覚において行使されているとすると、われわれはごく短期間とはいえ、必ずきめ細かな特徴を知覚的に再認できることになる。だが、そのような再認能力をもたなくても、ある瞬間にあるきめ細かな特徴を知覚することは可能ではなからうか。あるリンゴがある特定の赤に見えるけれども、その直後にある別のリンゴを見ても、そのリンゴはその特定の赤であるようにも、またそうでないようにも見えない。このようなことが可能ではなからうか。ケリーはわれわれの理解する知覚にはそのような可能

性を封じるものは何もないと主張する。もしそうだとすれば、われわれのいまの知覚がたまたま再認能力を含むとしても、その能力はわれわれの知覚にとって本質的とはいえない。それゆえ、われわれの知覚がそのような能力を含まないとしても、ある特定の赤に見えたリングは同じようにその特定の赤に見えるだろう。そうだとすれば、われわれのいまの知覚においても持続的な直示的概念が行使されているわけではないということになる（同様のことは赤や緑のようなもっときめの粗い一般的概念についてもいえる）。

たしかにケリーのいうように、知覚は各瞬間ごとに完結しており、持続的な概念を必要としないように見える。しかし、われわれが現にもっている知覚は再認を可能にするものであり、われわれはそのような知覚しか経験したことがない。したがって、再認能力を含まない知覚がありうるとしても、それがどのようなものなのか、じつのところわれわれには分からない。それはことによると、われわれのいまの知覚とはまったく別のものであるかもしれない。そうだとすれば、再認能力を含まない知覚が持続的な概念の行使を伴わないとしても、再認能力を含むいまのわれわれの知覚はそのような概念の行使を本質的に含むかもしれない。ケリーの反論は決定的ではない。

むしろマクダウエルの直示的概念にかんして問題なのは、知覚において直示的概念の行使が認められるとしても、その概念が本当に思考において行使される概念と同じものなのかどうかという点である。マクダウエルは思考において行使されるその概念が知覚においても行使されると主張する。それは、かれの関心が知覚による思考の正当化の問題にあることを考えれば、当然のことであろう。知覚において概念が行使されているとしても、その概念が思考において行使される概念と性格を異にするものだとすれば、知覚による思考の正当化の問題は依然として謎のまま残る。それは、知覚が思考とちがって非概念的内容をもつとしたときに、正当化の問題が大きな謎となるのと同じことである。正当化の問題を謎として残さないためには、知覚において行使される概念は思考において行使される概念とまったく同じものでなければならない。

しかし、それらは本当に同じなのだろうか。知覚が事物の特徴を知覚的に再認する能力を含む以上、知覚は概念の行使を含むといえてよい。それは概念であるための最小の条件（もっとも弱い意味で概念といえるための条件）すなわち一般性の条件を満たしている。チャーチランド(1997, p.64-5)は、人工ニューラルネットワークにおいて知覚的なパターン認識が可能になるとき、そこに概念ないしカテゴリーの誕生を認めてよいだろうという。しかし、このような知覚的な概念が概念として認められるとしても、それは思考において行使される概念と同じものであろうか。知覚的概念はある程度の一般性をもつとはいえ、思考において行使される概念ほど大きな一般性をもたないのではなからうか。

知覚内容の概念性が問題にされるとき、そこで問題にされているのは、もっぱら知覚が思考と同じ概念の行使を含むかどうかということである。知覚が思考と同じ概念の行使を含まないとすれば、たとえそれがあつた別の意味での概念の行使を含むとしても、知覚の内容は非概念的だとされる。つまり、知覚の内容が非概念的かどうかという問題の脈絡では、思考において行使されるのと同じ概念だけがもっぱら概念として認められる。以下の議論でも、「概念」という言葉をこのような意味で使用することにしたい。

二 錯視はなぜ消えないか

知覚は思考と同じく概念の行使を含むのだろうか。この問題を考察するうえでひとつの手がかりとなるのは、マクダウエルにとって概念が自発性(spontaneity)の領域に属するという点である。かれによれば、「強い意味での概念的 능력にとって本質的なことは、それが能動的思考すなわち自らの合理性を反省することが可能であるような思考において行使されうるということである」(McDowell 1994, p.47)。能動的思考は、たんに思考するだけではなく、自らが合理的であるかどうかを反省する能力も備えている。このような反省が可能なのはわれわれが自己意識をもっているからである(ibid., p.47, no.1)。自発性とはこのように思考を自己吟味的、自己訂正的に制御しつつ遂行する能力、ようするに自己反省的な思考能力のことである(ibid., p.49, p.52)。

たしかに意識的な思考は自己反省的な性格をもつ。われわれは意識的に考えるとき、正しく考えようとするし、ある考えが誤りであることが判明すれば、その考えを捨てる。概念はこのような自己反省的な思考活動において行使されうることをその本質とする。そしてマクダウエルによれば、そのような概念が知覚においても行使されているのである。しかし、もしそうだとすれば、なぜ知覚は思考とちがって自己訂正的ではないのだろうか。自発性に属する概念的な能力が知覚においても行使されているのだとすれば、知覚は思考と同じく自己訂正的であってよいのではないか。

周知のように、知覚においては、誤りが判明しても、それはそのまま存続する。たとえば、ミュラー＝リエルの錯視において、ふたつの線分が同じ長さであることが分かったあとでもなお、一方が他方より長く見える。一方が他方より長いという信念(思考の一種)は訂正されるが、知覚は訂正されない。相変わらず錯視は存続する。

知覚が思考と同じく概念的な能力によるものだとすれば、なぜ思考は自己訂正的なのに、知覚はそうではないのか。じっさい、クレーンは知覚と思考のこのような差異にもとづいて、知覚の内容が非概念的であることを立証しようとする(Crane 1992, p.151)。かれは誤った知覚の存続に加えて、さらに「滝の錯視」のように矛盾した内容をもつ知覚の存在も指摘する(ibid., p.152)。流れ落ちる滝をしばらく眺めたあと、静止したボールを見ると、そのボールは上に昇っていくように見えると同時に、静止しているようにも見える。上昇と静止は両立しない。この知覚は矛盾した内容を含んでいる(3)。信念なら、そのような矛盾した内容をもつものが形成されることはない。

知覚と思考のあいだにこのような自己反省性にかんする違いがあるとすれば、クレーンが主張するように、思考の内容は概念的であるのにたいし、知覚の内容は非概念的であると考えるほうがよいのではなからうか。

この問題にたいしてマクダウエルはどう答えるだろうか。かれならおそらく知覚の受容性(receptivity)にその答えを求めるだろう。知覚は思考と同じように概念の行使を含むとはいえ、思考とちがって受容的な側面をもつ。知覚は感性的意識という受容性における概念的な能力の行使である。それは思考のように、自己反省的意識という自発性における概念的な能力の行使ではない。たしかに概念的な能力にとってそのような自発性における行使が可能であることは本質的であるが、それは可能でありさえすればよいのであって、つねに自発性においてのみ概念的な能力が行使されなければならないということではない。概念的な能力は受容性においても行使されるのである(McDowell 1998a, p.367)。

知覚が自己反省的性格をもたない受容性における概念的能力の行使だとすれば、たしかに誤った知覚が存続したり、矛盾した知覚が形成されたりしても、とくに不思議はないように思われる。しかし、少し考えてみれば、やはり重大な疑問が浮かび上がる。概念的能力が自発性の領域に属するとすれば、なぜそれは受容性においても行使できるのか。概念的能力が自己反省的な場で行使されうることをその本質とするなら、それとはまったく反対の自己反省的でない場で行使されるようなことはありえないのではなからうか。概念はそれがどう行使されるかによって概念としての身分が決まるように思われる。まったく異なる仕方で行使されるような概念はもはや概念とはいえないのではなからうか。

じっさい、思考において行使される概念が知覚においても行使されるのだとすれば、知覚もまた自己反省能力をもちうるように思われる。一方の線分が他方の線分と同じ長さであることが分かれば、〈より長い〉という概念を〈同じ長さである〉という概念に代えて、一方が他方と同じ長さに見えるという知覚を形成できるのではなからうか。概念の行使である以上、この程度の自由度はありうるはずである。もちろん、知覚における概念の行使が受容性における行使である以上、まったく自由にどんな内容の知覚も形成できるというわけにはいかないだろう。もしそのようなことが可能なら、かえって世界からの制約をもたらすという知覚のもっとも重要な認識論的機能が失われてしまうことになるだろう。しかし、それでも、知覚において概念が行使されているのなら、明らかになった誤りを訂正するくらいの自由度が知覚にあってもよいのではなからうか。

訓練による知覚の可変性もこの考察を支持するように思われる。われわれは知覚的訓練を行うことによって、それまで知覚できなかったことを知覚できるようになる。たとえば、いろいろなレントゲン写真を何度も見ることによって、さまざまな病巣が見えるようになったり、何度も和音を聞くことによってその構成音を聞き分けられるようになったり、さまざまな料理を食べることによっていろんな味を味わうことができるようになったりする。知覚にこのような可変性があるとすれば、ミューラー＝リエルの図形において、両方の線分が同じ長さに見えるようにすることも原理的には不可能ではないだろう。それゆえ、もし知覚において概念が行使されているとすれば、ミューラー＝リエルの錯視は、思考の場合と同じように、ただちに訂正されて正しい知覚に置き換えられてもよいはずである。

しかし、われわれの知覚はたとえ誤りだと分かっても、思考のようにただちに訂正されることはない。たとえ訂正できるとしても、それには長い知覚的訓練が必要である。また、そのような訓練を行えば、それまで正しく見えていたものが逆に誤って見えるようになってしまうかもしれない（ミューラー＝リエルの錯視が消えれば、今度はふつうに並べた二本の線分が同じ長さに見えなくなるかもしれない）。

知覚と思考のこのような大きな違いを考えれば、知覚と思考において同じ概念的能力が行使されているとは考えがたい。思考において行使されるのが概念的能力だとすれば、知覚において行使されるのはそれとは別の何かだと考えるのが穏当であろう。

三 概念と一般性

ここで、あらためてそもそも概念とは何かということを考えてみよう。われわれはさきに概念であるためには、最小限、一般性がなければならないということを指摘した。すな

わち、概念は少なくとも複数の機会に行使できるものでなければならない。たった一度の機会にしか行使できないものはそもそも概念でない。マクダウエルが直示的概念の持続性にこだわるのもそのためである。

概念の規準を一般性に求めることは、知覚内容の非概念性を主張してこの問題に火を付けたエヴァンズにおいてすでに明瞭に認められる。かれによれば、思考はかれのいう「一般性制約 (generality constraint)」に従わなければならない。たとえば、ジョンは幸せだと考えることができる人は、ハリーは幸せだと考えることも、またジョンは悲しいと考えることもできなければならない。つまり、ある対象がある性質をもつと思考できる人は、ほかのさまざまな対象についてもその性質をもつと思考できなければならないし、またその対象がほかのさまざまな性質をもつと考えることもできなければならない。思考がこのような一般性制約を満たすのは、思考が構造化されているからである。つまり、ジョンは幸せだという思考と、ハリーは幸せだという思考は、幸せという同じ概念的能力の行使を含んでおり、それゆえジョンは幸せだと思考できる人は、ハリーは幸せだと思考することもできるのである (Evans 1982, pp.100-5)。

思考が一般性制約を満たすことから導き出されるのは、概念がそれに相応する一般性を備えていることである。幸せの概念はさまざまな対象にたいして行使されてさまざまな思考を形成できる。だからこそ、それは概念なのである。概念であるためには、思考が満たす一般性制約に応じた一般性がなければならない。

思考のあいだの推論関係から概念の条件を導き出そうとするクレーンも、概念の規準を一般性に求めているとみなすことができる。クレーンはフレーゲにならって、思考のあいだに推論関係が成立する理由を説明するためには、異なる思考のあいだに共通の構成要素があることを認めなければならないという (Crane 1992, pp.146-7)。たとえば、太郎は走るという思考と花子は走るという思考から、少なくともふたつのものが走るという思考を推論することができるのは、最初のふたつの思考が走るという共通の要素を含んでいるからである。そうでなければ、この推論は妥当ではなくなる。概念とは異なる思考のあいだに共通に含まれる要素であり、推論の妥当性を説明するものである。クレーンは概念を思考の「推論関連的要素」と規定している。

概念が異なる思考の共通の要素であるということは、概念がさまざまな思考において行使されうるということである。つまり、それは唯一の機会に行使されて唯一の思考しか形成しえないというのではなく、さまざまな機会に行使されてさまざまな思考を形成しうるということである。したがって、概念を推論関連的要素として捉えることも、概念の規準を一般性に求めているということができる。

さらに、概念の特徴を状況独立性に見ようとするケリーも、概念の規準を一般性に求めているとみなせる。ケリーは知覚内容のきめ細かさからその非概念性を論証しようとするピーコック (Peacocke 1998, pp.381-3) にたいして、そのような論証は決定的ではないと批判し (Kelly 2001a, p.603-5) むしろ知覚内容の非概念性は知覚的に表象される性質の状況依存性に求められるべきだとして、その論証を行おうとする (ibid., pp.606-8)。このような考えの背後には、もちろん、「概念は、直示的概念すらも、状況独立的な特徴を拾い出す」 (ibid., p.608) という考えがある。太郎が走る場合も、花子が走る場合も、走るという性質は概念的に表象されるときには、同じ性質として表象される。状況によって微妙に異なる

性質として表象されるわけではない。このように概念的に表象される性質が状況独立であるのは、もちろん、異なる状況を通じて同じ概念が行使されるからである。概念的な表象においては、表象される性質が異なる状況を通じて同一なだけでなく、行使される概念もまたそうなのである。こうして概念の条件をそれによって捉えられる性質の状況独立性に求めるケリーの考えも、概念の規準を一般性に求める試みとして捉えられる。

このように見てくると、概念であるための規準は思考が満たす一般性制約に見合うような一般性をもつことだといってよいであろう。このような規準にもとづいて、エヴァンズは知覚が思考の満たす一般性制約を満たさないことから、知覚の内容は非概念的だと論じ (Evans 1982, p.104, no.22)、またクレーンは知覚に思考のような推論関係が見られないことから、知覚の内容は非概念的だと結論し、さらにケリーは知覚において表象される性質が状況依存的であることから、知覚内容の非概念性を主張する。

しかし、知覚において行使される表象能力は本当に思考において行使される概念的 능력と同じだけの一般性を備えていないのであろうか。知覚的に表象される性質が状況依存的であるというケリーの指摘は、この問題を考察する取っ掛かりを与えてくれるので、簡単にその内容を見ておこう。ケリーはメルロ＝ポンティにならって、たとえば羊毛のカーペットの青さは光沢のある鉄球の青さと同じようには見えないだろうという。なぜなら、青さがどのように知覚されるかは、それがどんな対象の性質であるかに完全に依存するからである。たとえ概念的にはそのふたつの青さが同じであるとしても、知覚的にはそれらは異なって見えるのである (Kelly 2001a, pp.607-8)。

知覚的に表象される性質がこのような状況依存性を有するとすれば、状況がほんの少しでも異なると、知覚的に表象される性質も異なることになる。それゆえ厳密に言えば、同じ性質が二度、知覚的に表象されることはないということになる。というのも、厳密に言えば、われわれはまったく同じ状況に二度、出会うことはないからである。

しかし、知覚的に表象される性質は本当にそのように唯一的なのだろうか。第一節で見たように、知覚においても再認能力が認められる。われわれはきのう見た赤いトマトといま見ている赤いリンゴを同じく赤いものとして知覚的に同定しうる(ともに赤く見える)。またある赤いリンゴを見た直後なら、別の赤いリンゴを見たときに、それらを同じ特定の赤を帯びたものとして同定できる(ともにその特定の赤に見える)。このように知覚に含まれる表象能力にもある程度の一般性がある。

たしかにケリーが指摘するように、知覚的に表象される性質には状況依存性がある。とくにきめ細かいレベルで表象される性質には強い依存性が認められよう。しかし、この依存性は本当に知覚的に表象される性質を唯一的にするようなものであるだろうか。状況がほんの少しでも変われば、知覚的に表象される性質も変わるというのは、状況依存性をたんに思弁的に極限化したものにすぎず、われわれの知覚の実態に即しているとは思えない。知覚的に表象される性質がどれほど状況依存的であれ、状況の差異が十分小さければ、それはそれらの状況を通じて同一の性質として表象されうように思われる。したがって、このような場合でも、知覚において行使される表象能力は異なる状況を通じて行使される一般性を備えているのである。

問題はむしろ、知覚において行使される表象能力がたとえ一般性を有しているとしても、思考において行使される概念的 능력と同じだけの一般性を有しているかどうかという点で

ある。知覚に含まれる表象能力は概念的な能力よりも一般性が明らかに劣るように思われる。

たとえば、つぎのようなケースを考えてみよう。太郎は走っているイヌを何度も眼にしたことがあり、したがって走っているイヌを眼にすると、それを走っているイヌとして知覚することができる。また、かれは眠っているネコを何度も眼にしたことがあり、したがってそのようなネコを眼にすると、それを眠っているネコとして知覚することができる。しかし、太郎は眠っているイヌや走っているネコをほとんど眼にしたことがないために、それらを眠っているイヌとして、また走っているネコとして知覚することができない。せいぜい、何か動物が静止しているものとして、また動物が移動しているものとして知覚できる程度である。知覚においては、このような想定が十分可能であるように思われる。

これにたいして、思考においては、イヌが走っていることと、ネコが眠っていることを太郎が思考できるとすれば、かれは当然、ネコが走っていることも、イヌが眠っていることも思考できる。そうでなければ、かれはそもそも、イヌが走っていることや、ネコが眠っていることを思考できているとはいえない(4)。

そうだとすれば、明らかに、知覚における表象能力は思考における概念的な能力ほど大きな一般性をもたない。走っているという性質を知覚的に表象する能力は、イヌを知覚的に表象する能力と組み合わせられて走っているイヌを表象する知覚を形成できるが、ネコを知覚的に表象する能力と組み合わせられて走っているイヌを表象する知覚を形成することはできない。しかし、走っているという性質を概念的に表象する能力は、イヌを概念的に表象する能力とも、ネコを概念的に表象する能力とも組み合わせられて、イヌが走っているという思考も、ネコが走っているという思考も形成できる。

なぜ概念的な能力が知覚における表象能力よりも一般性があるのかを正確に説明することはむずかしい。が、大雑把にいえば、それは思考のあいだに推論関係があるからである。思考には知覚に直接もとづくものとそうでないものがあり、それらが推論関係によって網の目のように結び合わされている。知覚に直接もとづかないような思考もこのような思考の体系のなかに位置づけられることによって思考としての地位を得る。太郎が走っているネコを知覚できなくても、ネコが走っていると考えることができるのは、かれがその思考を他のさまざまな思考と適切な仕方と推論的に関係づけることができからである。思考はこのように知覚に直接もとづくものを超えて推論的に結び合わされた独自の領域を形成する。このような思考の領域を可能にするのが概念的な能力である。それゆえ、概念的な能力は知覚における表象能力よりも一般性があるのである。

知覚において行使される表象能力と思考において行使される概念的な能力のあいだにこのような決定的な一般性の違いがあるとすれば、たとえ知覚における表象能力に一般性があるとすると、その能力を概念的とみなすわけにはいかないだろう。つまり、知覚においては、思考において行使される概念的な能力とは別の能力が行使されていると考えるべきなのである。

四 知覚はいかにして思考を正当化するか

知覚が非概念的な内容をもつとすれば、それははいかにして概念的な内容をもつ思考を正当化するのだろうか。この問題を考察するまえに、なぜそもそもわれわれは知覚が思考

を正当化すると思うのかを考えておきたい。というのも、われわれがそう思う主たる動機と思われるものが必ずしも、知覚が思考を正当化するという事態を正確には示していないからである。

知覚が思考を正当化するというのは、われわれが知覚にもとづいて思考を形成するとき、その過程において知覚が思考を正当化しているということである。われわれはなぜこの過程において、知覚が思考を正当化していると思うのであろうか。それはおそらく、われわれが誰かに思考の理由をたずねられたときに、まさに知覚をその理由として挙げるという実践を行っているからであろう。われわれは、ある対象を見て、それを正方形だと思うとき、誰かに「なぜ正方形だと思うのか」とたずねられれば、「正方形に見えるから」と答える。このような説明が行われる背景にはもちろん、われわれが知覚にもとづいて思考を形成するとき、じっさいに知覚が思考の理由となると考えて、思考を導き出しているのだという想定がある。われわれはたんに知覚に続いて思考を形成するのではなく、知覚が思考の理由になると考えて、そうするのである。知覚が思考を正当化と思われるのは、知覚にもとづく思考の形成過程にかんしてこのような想定があるからだと思われる。

そうすると、知覚が思考を正当化するということは、知覚にもとづく思考の形成過程において、われわれが現に知覚を思考の理由として考慮して、そのうえで思考を導き出しているという事態だということになる。マクダウエルはまさにそう考える。かれは、思考の理由となる知覚はまさに当人が自分で思考の理由として提示しうるものなければならないという(McDowell 1994, p.165)。かれによれば、われわれは知覚にもとづいて思考を形成するとき、まさに知覚を思考の理由として挙げて、思考を形成しているのである。これは理由関係を自己反省的な自発性の領域に位置づけるマクダウエルとしては当然のことであろう。

しかし、知覚にもとづいて思考を形成するとき、われわれは本当に知覚を理由として持ち出して思考を形成しているのだろうか。ある対象が正方形に見えるから、それを正方形だと考えるのだろうか。たんに正方形が見え、それに続いて正方形だと考えるだけのことではないのだろうか。正方形に見えることと正方形だと考えることのあいだに理由関係が事実上あるとしても、それを考慮して、正方形だと考えるわけではないのではなからうか。

ある思考にもとづいて別の思考を形成する場合には、たしかにその思考を理由として持ち出して別の思考を形成しているといいうる。花子は病気だという思いにもとづいて花子は欠席するという思いが生じるとき、われわれは、花子は病気だと思い、だから花子は欠席すると思う。たんに花子は病気だと思い、それに続いて花子は欠席すると思うわけではない。病気だという思いが欠席するという思いの理由となると考えて、欠席すると思うのである(5)。したがって、なぜ「花子は欠席すると思うのか」とたずねられて「花子は病気だと思うからだ」と答えるのは、たしかにわれわれの思考過程を忠実に反映している。

しかし、知覚にもとづいて思考が形成される場合はそうではないのではなからうか。われわれは、ある対象が正方形に見え、だからその対象は正方形だと考えるのではない。たんに正方形に見え、それに続いて正方形だと考えるだけである。そう見えることがそう考えることの原因となると思って、そう考えるのではない。したがって、「なぜ正方形だと思うのか」とたずねられて「正方形に見えるから」と答えることは、知覚から思考が形成される過程を忠実に反映しているとはいえない。

しかも、たとえ正方形に見えることが正方形だと考えることの原因になると思って、そう考えようとしても、そのためには、われわれはまず、正方形に見えることと、正方形だと考えることをともに思考の領域に取り込まなければならない。つまり、自分にはある対象が正方形に見えていると考え、また自分はその対象が正方形であると考えていると考えなければならない。そうしてはじめて、正方形に見えることが正方形だと考えることの原因になることが可能になる。しかし、ある対象が正方形に見えるとき、正方形に見えるという知覚の内容は概念化されてしまう。知覚を思考のうちに取り込もうとすると、われわれは知覚の内容を概念化して、知覚を概念的内容をもつものとして捉えざるをえない。もちろん、そのように概念化するからこそ、知覚と思考のあいだに理由関係を認めることが容易になるのである。知覚の内容を概念化することは、マクダウエルが考えるように、もともと知覚の内容が概念的だとすれば、もちろん何の問題もない。しかし、知覚の内容が本来、概念的でないとしたら、そのように概念化された知覚はもはやもとの知覚ではなくなってしまう。いや、それどころか、それはいかなる知覚でもなくなってしまう。それはようするに一種の思考（知覚の装いをした思考）なのである。

われわれが知覚と思考のあいだの理由関係を考慮しようとしたら、概念化された知覚と思考のあいだの理由関係を考慮するしかない。しかし、われわれは知覚から思考を形成するとき、そのような理由関係を考慮して、そうするのではない。われわれはそうした考慮なしに端的に知覚から思考を形成する。むしろ逆に、知覚の概念化が可能なのは、そのような知覚から思考への端的な移行が可能だからである。ある対象が正方形に見え、そして端的にその対象は正方形だと考える。われわれはこうして形成された思考の内容を逆に知覚に帰して、概念的内容をもつ知覚を構成するのである。概念化された知覚はこのようにして可能となる。それはもとの知覚から産み出された思考にもとづいて遡及的に構成されたものであり、一種の虚構なのである（6）。

知覚に訴えて思考を正当化するというわれわれの説明実践は、二重の意味で、知覚から思考が形成される過程を正しく表していない。ひとつには、その過程において知覚が思考の理由となることが考慮されることなどないのに、そのような考慮があるかのごとく思わせる。また、知覚の内容が概念的であるとはかぎらないのに、概念的であるかのように思わせる。われわれはそのような説明実践に惑わされずに、知覚から思考が形成される過程そのものを注視しなければならない。そうすれば、われわれは知覚から理由の考慮なしに端的に思考が形成されるのを見いだすであろう。知覚が思考を正当化するといっても、知覚と思考のあいだの理由関係が考慮されて、思考が形成されるわけではない。また、知覚の内容が非概念的だとすれば、知覚を概念化しないかぎり、そもそも知覚と思考の理由関係を考慮することすらできない。知覚が思考を正当化するということは、たんに知覚から思考が端的に形成されるということにすぎない。それが実態なのである。そうだとすれば、いったいこのような過程にどんな意味で正当化の関係を認めることができるのだろうか。知覚から思考が端的に形成される時、知覚はいかなる意味で思考を正当化しているのか。これが本来、知覚による思考の正当化の問題として問うべきものなのである。

しかし、そうだとすれば、われわれはむしろデイヴィッドソンにならなくて、そもそも知覚が思考を正当化するという考えを断念したほうがよいのではなからうか（Davidson 1986, p.317）。デイヴィッドソンは知覚と思考のあいだに因果関係しか認めない。われわれもこれ

になったほうがよいのではなからうか。しかし、ここでひとつ注意すべき点がある。それはデイヴィドソンがそもそも知覚にいかなる表象内容も認めないということである。知覚に表象内容を認めないとすれば、たしかに知覚と思考のあいだに正当化の関係を認めることはできないだろう。しかし、知覚が概念的な内容ではないにせよともかく内容をもつとすれば、事情は異なりうる。たしかにマクダウエルのように、知覚が非概念的の内容をもつとしても、知覚と思考のあいだの理由関係が考慮されないとすれば、知覚が思考を正当化するとはいえないと主張する論者もいる(McDowell 1994, p.162-6)。しかし、知覚と思考のあいだの正当化として、もっと弱いものを認めることができるのではなからうか。つまり、思考間の正当化のように理由関係の考慮を含む強いものではなく、それを含まないもっと弱い意味での正当化を認めることができるのではなからうか。

われわれは、AからBが形成される時、AがBの正しさを保証する(Aが正しければ、Bも正しい)ならば、AがBを正当化するといつてよいように思われる。この正当化は、AがBの理由となることの考慮を含むような正当化ではなく、たんにAとBのあいだに理由関係が成立しているだけの正当化であるが、それでも弱い意味で正当化といつてよいであろう。

そうだとすれば、この弱い意味で、知覚は思考を正当化する可能性がある。知覚が思考を正当化するというとき、われわれが想定すべきであったのは、この弱い意味での正当化である。そしてそのような正当化がいかにして成り立つかを問うのが、知覚がいかにして思考を正当化するかという問題であったのである。そうだとすれば、結局のところ、この問題は知覚がいかにして思考の正しさを保証するか(知覚が正しいときにいかにして思考も正しくなるか)を明らかにする問題だということになる。

知覚の内容が概念的であり、したがってそれにもとづいて形成される思考と同じ内容をもつなら、知覚が正しいときに、思考も正しくなるのは、自明である。しかし、知覚の内容が非概念的だとすれば、知覚が正しいときに、いかにして概念的の内容をもつ思考が正しくなるのだろうか。この問題は、結局のところ、非概念的の内容とはそもそもどのようなものか、それは概念的の内容とどんな関係があるのかという問題に帰着する。

ここで、知覚にもとづく信念の形成を「表現過程」として捉える門脇(2002, p.21)の考察が示唆に富む。かれはニッコウキスゲを眼にして、これはニッコウキスゲだと思ふとき、そこでは「不確定」な知覚的意味が「これはニッコウキスゲだ」という命題において限定され、その命題を内容とする信念が形成されるのだという。そしてその信念は「命題的な限定を受ける以前の、より豊富な不確定の意味によって分節化されている知覚経験それ自身の、まさに表現形である」と語る。これは、われわれの言葉でいえば、知覚の非概念的の内容(不確定な意味)が概念的能力の行使によって信念の概念的の内容(命題)として表現されるということになろう。しかし、この「表現」ということをさらにどう理解すればよいのだろうか。それをどう理解すれば、知覚が信念の正しさを保証するといえるようになるのだろうか。

残念ながら、知覚による信念の正当化にかんする門脇の考察は、知覚がいかにして信念の正しさを保証するかという点よりも、われわれが知覚に訴えて信念を正当化するとき、そこにどのようなことがらが含まれているかを分析することに主眼が置かれており、知覚がその表現である信念の正しさを保証することは自明だとされているようである(門脇

2002, p.21; 2003, pp.106-8)。しかし、なぜ信念が知覚の表現であるとすれば、知覚が正しいときに、信念も正しくなるのだろうか。あるいは、そうなるようにするには、表現関係をどう理解すればよいのだろうか。

知覚の非概念的の内容について「シナリオ内容」などの道具立てを用いてほとんどただひとり実質のある説明を展開しているピーコックは、ある対象が正方形に見えるとき、「その非概念的の内容が正しいための条件が満たされる場合、その対象はじっさいに正方形であろう」(Peacocke 1992a, p.80)という。つまり、われわれが表象する対象は、知覚の非概念的の内容が正しければ、思考の概念的の内容も正しくなるようなあり方をしている。いいかえれば、知覚の非概念的の内容を正しくするような対象のあり方は同時に思考の概念的の内容を正しくするようなあり方でもあるのである。

このことがいったいどうしてそうであるのかは、もちろんさらに説明を要するであろう。そしてそのためには、知覚の非概念的の内容を正確に規定するために、脳科学レベルでの知覚の精細な機能的分析が必要となる。そのような分析によらずに、ある対象が正方形に見えるときの知覚の内容をたんに「その対象は正方形である」と表現したのでは、非概念的な内容をたんに概念化してしまうだけのことになる。知覚の非概念的の内容を概念化せずに正確に規定するためには、今後の成果も含めて脳科学の成果を援用しなければならないだろう。したがって、それは今後の課題として、ここではさしあたり、知覚の非概念的の内容が正しくなるような世界のあり方は思考の概念的の内容が正しくなるようなあり方でもあるということにとどめておくことにしたい。

五 二種の知覚

最後に、知覚内容の非概念性を脅かすおそれのある「二重視覚システム」の仮説(Clark 2001)について検討しておこう。

われわれはふつう知覚について、それが思考の形成に利用されるだけではなく、直接、行動の形成にも利用されると考えている。コップを見ながらそれに手を伸ばすとき、われわれはけっしてコップの知覚からコップがどの位置にあるかを考えて、その思考にしたがって手を伸ばすわけではない。ただコップを見て、その知覚に導かれて手を伸ばすだけである。たとえコップがどの位置にあるかを考えたとしても、その思考はコップに手を伸ばすのに必要なきめ細かな手の動きを可能にしないだろう。そのようなきめ細かな動きは知覚のきめ細かな内容によって可能になるのである。

この常識的ともいえる考えにかんしてここでとくに注目したいことは、同一の知覚が思考の形成と行動の形成の両方に利用されるという点である。つまり、思考の形成に利用される知覚と、行動の形成に利用される知覚という、二種類の知覚があるわけではないということである。二重視覚システムの仮説はまさにこの常識的な見方を否定するように思われる。この仮説によると、視覚においては、思考の形成に利用される視覚と、行動の形成に利用される視覚は別である。クラークは認知科学や脳科学のさまざまな成果を利用して、その仮説の立証を試みている。かれはひとつの重要な論拠として、思考用の視覚と行動用の視覚の内容が食い違うことがありうることを挙げている。たとえば、ティチナーの円対比錯視を考えてみよう。同じ大きさのふたつのコイン a と b があって、a は多くのかなり

小さなコインによって囲まれ、bはもっと大きなくつものコインによって囲まれている。このとき、aのほうがbより大きく見える。しかし、aとbを指でつかもうとすると、われわれはどちらのコインにたいしても同じ指の幅で向かっていき、どちらも同じようにうまくつかむことができる。この例は、思考に利用できる意識的な視覚（aとbが異なる大きさに見える）の内容と、行動に利用される無意識的な視覚（指の幅を制御する視覚）の内容が異なることを示している。したがって、そのふたつの視覚は異なると考えられるのである（Clark 2001, pp.503-4）。

また、脳の神経回路の観点からも、思考用視覚と行動用視覚の二種類があることが裏付けられる。眼から入った刺激は神経パルスとなって脳の後頭葉に伝えられ、そこから側頭葉に向かう「腹側経路」と、頭頂葉に向かう「背側経路」に別れる。思考用視覚を担当するのは腹側経路であり、行動用視覚を担当するのは背側経路である。このように思考用視覚と行動用視覚は脳の構造上からもそれを担当する部位が別れている。したがって、それらは異なると考えられる（ibid., pp.501-3）。

思考用視覚と行動用視覚が別だとすると、われわれがふつつ視覚とよんでいるのは思考用視覚である。思考用視覚は意識的であり、世界がわれわれに一定の仕方で見えるときの視覚である。それは記憶として残る。それにたいして行動用視覚は無意識的であり、視覚の内容は意識にのぼらない。したがって、記憶としても残らない。われわれはその内容をそれにもとづく行動のあり方から推察するしかない（7）。

われわれがふつつ視覚と考えている意識的な視覚がもっぱら思考用であり、直接、行動の形成に用いられることがないとすると、その視覚の内容が非概念的だという考えも怪しくなるとクラークは指摘する。非概念的なのはむしろ、行動のきめ細かな制御に用いられ、それゆえきめ細かな内容をもつであろう行動用視覚であり、もっぱら概念的な思考の形成に用いられる意識的視覚は、それにふさわしい内容、つまり概念的な内容をもつのではない。クラークは、意識的な視覚がもっぱら思考に用いられるということはマクダウエルの考えにとって有利だと見る。ただし、クラーク自身は意識的な視覚が非概念的内容をもつ可能性もなお残るとして結論を保留している（ibid., pp.513-5）。

意識的な視覚がもっぱら思考用だとすれば、その視覚の内容は概念的だということになるのだろうか。非概念的なのは行動用視覚であり、意識的な思考用視覚は概念的だということになるだろうか。けっしてそんなことはないように思われる。

たしかに意識的視覚がもっぱら思考用だとすれば、それが行動のきめ細かな制御に用いられることはないということになる。しかし、だからといって、意識的視覚がきめ細かな内容をもたなくなるわけではない。それはたとえ行動に用いられなくても、現に意識にのぼるようなきめ細かな内容を備えている。それに、そもそも意識的視覚が非概念的内容をもつかどうかにとって問題となるのは、それがきめ細かな内容をもつかどうかということではない。問題は、意識的視覚において行使される表象能力が概念的な能力と同じだけの一般性をもつかどうかである。われわれは第二節で知覚における表象能力の一般性が概念的な能力のそれに及ばないことを、走っているイヌと眠っているネコの知覚を例にとって示したが、その論証は意識的知覚がもっぱら思考用だとしても、それによってくつがえされるようなものではない。なぜなら、その論証は意識的知覚が思考用かどうかということにまったく関係なく行われたからである。

しかし、意識的知覚がもっぱら思考用であり、行動のきめ細かな制御に用いられないとすると、その内容が非概念的だとしても、そのことは大した意味をもたなくなるのではなからうか。意識的知覚の内容が概念的であろうとなかろうと、それはただ概念的な思考の形成に用いられるだけである。意識的知覚が概念的な思考にはできないような行動のきめ細かな制御を可能にするというのなら、その内容が非概念的であることも十分意味がある。しかし、そうでなく、たんに思考の形成に用いられるだけなら、その内容が非概念的だとしても、それはあまり意味がないことではなからうか。

この疑問に答えるためには、われわれは意識的知覚が非概念的内容をもつがゆえに、それが概念的内容をもつとした場合には見られないような独自の働きを有することを示さなければならない。何かそのような働きがあるだろうか。意識的知覚の内容が概念的であるとすれば、それにもとづいて形成される思考はそれと同じ内容をもつものただひとつに限られる。しかし、意識的知覚の内容が非概念的だとすれば、そうではない。非概念的内容を概念化して思考の概念的内容を構成するには複数の仕方がありうる。この概念化が正確にはどのようなものであるかについては、そもそも意識的知覚の非概念的内容が何であり、また思考の概念的内容が何であるかも含めて、まだまだ多くのことを解明しなければならない。しかし、それでも、意識的知覚の内容が非概念的だとすれば、知覚から形成される思考にある程度の自由度があるということはとりあえずいえよう。思考は知覚による制約を受けつつも、知覚によって一義的に規定されてしまうことはない。意識的知覚の内容が非概念的だとすれば、それが概念的だとした場合には見られないような自由度を思考は獲得する。そうだとすれば、意識的知覚の内容が非概念的だということにも十分意味があるように思われる。

注

(1) 知覚の内容を非概念的だとするおもな論者としては、Evans 1982, Crane 1992, Peacocke 1992a; 1992b, Kelly 2001a; 2001b がいる。また知覚の内容を概念的だとする論者としては、McDowell 1994, Brewer 1999 がいる。

(2) McDowell 1994, pp.56-7 においては、この区別が明瞭でなかったが、Peacocke 1998, p.383 による反論を契機に、McDowell 1998b, pp.414-5 では、その点が明確化されている。

(3) 考えてみれば、知覚が矛盾した内容をもつことは別に珍しいことではない。たとえば、マッチ箱は直方体に見えると同時に、その側面は長方形ではなく平行四辺形に見える。また、遠ざかる列車は次第に小さく見えるが、その大きさが変化しているようには見えない。Clark 2001, p.506 にも、ミュラー＝リエルの図形に少し手を加えたものなどいくつかの矛盾した内容を含む知覚の例が挙げられている。

(4) 知覚と思考のこのような違いはそれぞれに含まれる表象が構文論的構造をもつかどうかという観点から説明可能であるが、この点については、信原 2002, pp.197-205 を参照。表象の概念的内容と非概念的内容の問題は表象の構文論的構造の有無の問題と密接な関係がある。また、認知にかんする二大パラダイムである古典的計算主義とコネクショニズムの根本的な対立も表象に構文論的構造を認めるかどうかという点にある。この点について詳しくは、信原 2000 を参照。

(5) これはしかし、意識的に注意深く思考が展開される場合に限るべきだろう。漫然と

思考が展開される場合には、理由関係が考慮されるとは必ずしもいえない。しかし、このような思考過程は概念的な能力にもとづく推論過程というよりも、連合能力にもとづく推移過程と見るべきであろう。

(6) この遡及的構成は、ドレイファスがトードスに即して論じた「欲求」の現象学的な扱いと同様である(Dreyfus 2001, p.xvii、訳 p.???)。欲求のなかには、あらかじめ内容が確定しているわけではなく、欲求が実現されてはじめてその実現に見合うような仕方で内容が遡及的に構成されるものがある。

(7) 視覚だけではなく、知覚一般にかんして二重システムが成立しているかどうかは興味深い問題であるが、クラークは少なくとも聴覚にかんしてそのようなシステムが成立していることを示す研究事例を挙げている(Clark 2001, p.503)。

文献

Brewer, Bill. 1999. *Perception and Reason*. Oxford: Oxford University Press.

チャーチランド、ポール・M. 1997. 『認知哲学—脳科学から心の哲学へ』信原幸弘・宮島昭二訳、産業図書

Clark, Andy. 2001. "Visual Experience and Motor Action: Are the Bonds Too Tight?." *The Philosophical Review* 110:495-519

Crane, Tim. 1992. "The Nonconceptual Content of Experience." In *The Contents of Experience*, ed. T.Crane, 136-157. Cambridge: Cambridge University Press.

Davidson, Donald. 1986. "A Coherence Theory of Truth and Knowledge." In *Truth and Interpretation: Perspectives on the Philosophy of Donald Davidson*, ed. E. LePore, 307-319. Oxford: Basil Blackwell.

Dreyfus, Hubert L. 2001. "Introduction I: Todes's Account of Nonconceptual Perceptual Knowledge and Its Relation to Thought." In *Body and World*, S. Todes, xv-xxvii. Cambridge, MA: MIT Press. 邦訳「非概念的な知覚的知識とその思考への関係についてのトードスの説明」『思想』No.949(二〇〇三年五月号)

Evans, Gareth. 1982. *The Varieties of Reference*. Oxford: Oxford University Press.

門脇俊介 2002. 『理由の空間の現象学—表象的志向性批判—』創文社

-----, 2003. 「ニーチェの『困い』に抗して—反自然主義のもう一つ別の可能性—」『思想』(二〇〇三年四月号)九四八号、九三—一〇頁

Kelly, Sean D. 2001a. "The Non-conceptual Content of Perceptual Experience: Situation

Dependence and Fineness of Grain." *Philosophy and Phenomenological Research* 62:601-608.

-----, 2001b. "Demonstrative Concepts and Experience." *The Philosophical Review* 110:397-420

McDowell, John. 1994. *Mind and World*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

-----, 1998a. "Précis of *Mind and World*." *Philosophy and Phenomenological Research* 68:365-368.

-----, 1998b. "Reply to Commentators." *Philosophy and Phenomenological Research* 68:403-431.

信原幸弘 2000. 『考える脳・考えない脳』講談社現代新書

-----, 2002. 『意識の哲学』岩波書店

Peacocke, Christopher. 1992a. *The Study of Concepts*. Cambridge, MA: MIT Press.

-----, 1992b. "Scenarios, Concepts and Perception." In *The Contents of Experience*, ed. T. Crane, 105-135. Cambridge: Cambridge University Press.

-----, 1998. "Nonconceptual Content Defended." *Philosophy and Phenomenological Research* 68:381-388.

信原幸弘（のぶはら ゆきひろ）一九五四年生。東京大学大学院理学系研究科博士課程単位取得退学。東京大学。科学哲学。『心の現代哲学』『意識の哲学』